



妻と一緒に育つてきた

毎日がしあわせ

妻

なかむらいくこ
中村伊久子さん(63)
59歳を機にそれまで働いていたパート先を退職。前頭側頭型認知症の診断を受け、現在「いずみの杜診療所」に通所、デイケアサービスを利用している。

夫

なかむらとおる
中村通さん(62)
会社員として働き42歳で独立。商品コンセプトの構築をおこなう。また、東北文化学園大学と同専門学校で建築とデザインについて非常勤講師として教えている。

伊久子さんの病状の経過

2012年1月

通さん「家内が仕事を辞めてしばらくして、それまでほとんどお酒を飲まなかったのに、毎晩飲むようになりました。また、料理は家内がやっていたのですが、だんだんしなくなり、しても毎日同じ料理ばかり。また、家族に対して暴言を吐くように。徐々に生活が退廃的になっていきました」

13年2月～14年3月

通さん「13年1月に近くの脳神経内科で家内が『アルツハイマー型認知症』との診断を受けました。そこで治療を受けていたものの、家内の様子は悪化していき、家内が一人で買い物にいくと、1時間半くらい、買い物かごの中に商品を取ったり戻したり。そして、その商品を持って帰ってきてしまうこともありました。そこで、スーパーの店員さんに「こ

の人がお店に来たら連絡をください」と家内の顔写真と私の連絡先を書いた紙を渡していました。無理に行動をやめさせようとしても興奮してしまつて……。また、夜、私の仕事にこっそり家内が外へ出かけて、骨折して帰ってきたことも。仕事でつきつきりではいられなかったので大変でした」

14年4月

通院先の病院では、医師は伊久子さんにいつもと同じ問診をする。「今日は何日ですか?」「今日のご飯は何を食べましたか?」……そしていつも同じ薬が処方される。

通さん「病状についての説明や、私に家内の状況を聞くこともなかったし、また、

これまでの出来事

2012年1月

伊久子さんがパートを辞める

12年夏頃

伊久子さんの様子が変わってくる。通さんと伊久子さんの口論が増えていった。

13年1月

夕飯を食べて間もなく、伊久子さんが「夕飯の準備をする」と言い出したのを機に近くの脳神経内科を受診。「アルツハイマー型認知症」との診断を受け、薬を処方された。

13年2月～14年3月

通院と薬の服用を続けるが、伊久子さんの状態は悪化。この頃、通さんと息子さんはかなり疲弊していく。

14年4月

伊久子さんの病状はさらに悪化。東北文化学園専門学校の介護福祉科の先生に、伊久子さんの状況を相談、地域包括支援センターへの相談を勧められる。「いずみの杜診療所」に電話。同診療所で「前頭側頭型認知症」の診断を受ける。

14年10月

伊久子さんが週に4日、同診療所のデイケアに通い始める。病状の悪化にともない毎日通うようになった。

15年4月

毎日のデイケアを通じて次第に状態が改善し始める。

15年12月

同診療所に併設されている「こども園」で、伊久子さんがお絵かきや散歩、お遊戯の手伝いなど、子どものお世話を始める。

16年

伊久子さんが前向きな気持ちでデイケアに通うようになる。

本人・家族の声 Story

心が通じる認知症の人の支え方

徘徊や食事をしたことを忘れてしまふ、家族を言葉で責める……。 「認知症の病気のせいだ」と頭でわかっているけど、このような行動を受け入れることは、介護する人にとっては心身ともにつらいもの。一時は「限界だ」と思われた介護生活からどうトンネルを抜けたか、サポートする人たちのコメントとともに追った。

取材・文/加納さゆり(編集部) 撮影/門間新弥



「どうして、なんでこんなことをするんだ」という疑問がつのりました

通さん



認知症の方は確定診断がついた後の過ごし方もとても大切です

川井さん

側頭型認知症」の診断を受ける。
その診察はこれまでとは異なっていた。
通さんの伊久子さんの言動に対する
「どうして、なんでこんなことをする
んだ」という疑問に答えてくれたのだ。

山崎医師「生活の変化がどうして起こったのか、脳の画像所見を絵に描きながらご主人に説明しました(下写真)。ご家族がすぐに理解できなくてもいいんです。当事者の不思議な変化にふり回されてばかりいるよりずっといい。少しずつでも『この変化って病気のせいかな』と受け入れてもらえればいいと思います。
伊久子さんには、健康的な生活パターンをつくるためにデイケアに通うことを日常習慣に取り入れるよう勧めました」
しかし、当初、伊久子さんはデイケアに通うことを嫌がった。

川井さん「来たくない』『暇』『寂しい』。いろいろな思いがあると思います。でも、ご本人に『デイケアに来てよかったな』と思ってもらうために、まず一つ、役割でも趣味でも見つけられるまでが大切だと考えています。その一つが見つかることで、ご本人が主体的にデイケアに通うように変わっていきます。私たちはみなさんの居場所づくりの応援をします」

こうした支援を受けて、伊久子さんの様子も変わっていった。デイケアで伊久子さんから職員に「何か手伝うことはある?」と自ら声をかけるようになっていった。

川井さん「手伝うことを通じてまわりの人から『ありがとう』と言ってもらえることがうれしかったようです。そこから変わっていったように思いますね」

15年12月
山崎医師「伊久子さんに、よりご自身の役割を取り戻してもらうことが大切だと考えました。そこで、『子どもが好き』という伊久子さんへ、『こども園』に通う子どものお世話を勧めました」
しばらくすると伊久子さんはデイケアに行く前にこう話すようになった。
伊久子さん「こたろうくんのみずぎちやんに会うのが楽しみ。待っていてくれるから、いずみの杜に行かなきゃ」

16年
前向きに伊久子さんがデイケアに通うようになった頃、通さんも自分自身の変化を感じていた。
通さん「私と家内、どちらが先に変わった

たのかわからないですけどね。家内の様子に慣れていったこともあり、一緒に『育ってきた』んだと思います。山崎先生に説明していただいたことで、家内の困った言動の原因はわかった。そこで、私たちがそれを認めていって、変わらなきゃいけないな、と」

そして、伊久子さんにも変化があった。
通さん「それまでは『くさんが嫌だ』と言うこともあったのですが、今ではまわりに感謝の気持ちを持っていくようですよ。言葉もやさしくなって、人が変わったように思うこともあります」

山崎医師「病気の影響で苦手な部分はあります。でも、うまく付き合っていく方法をみつけていけばいいんです。また、伊久子さんは今、毎日を楽しんで、そしていきがいを感じています。不安感もない。ご家族やいずみの杜で出会う人たちとの社会があつて、それがうまくいっていることが一番です」

最近、通さんは「伊久子さんとう心が通じ合っている」。こう感じるようになってきたという。伊久子さんは「毎日がしあわせ」という。通さんと伊久子さんは、認知症を通じて、より深い新しい関係を築いていっているようだ。



診断と治療とともに本当に大切なのは、
医師が本人に代わって本人の症状を代弁することです

山崎医師

前頭葉の機能が低下し、我慢することが苦手になり、嗜好や生活がパターン化したと山崎医師は説明した
(撮影/加納さゆり)



伊久子さんの
デイサービスでの
ある一日

9:30
いずみの杜へ
元気に「おはようございます!」とみなさんにあいさつ



10:00~11:00
こども園へ通う
お子さんたちのお世話

一緒にお絵かきしたり、散歩をしたり。伊久子さんが自身の役割を取り戻すきっかけとなった

11:00~12:00
お風呂



12:00
お昼ご飯



食事の後は食器洗いをすすんでおこなう

16:00
通さんが伊久子さんを
迎えに来る

15:00
おやつ
まわりと談笑しつつ、自らの人のコップも洗う



ゲームの得点をボードに書いて、順位の発表をする

13:00~15:00
レクリエーション

当事者の視点を
理解して可能性を生かす

3年ほど前から「宮城の認知症をとらえる会」の活動をしています。そこで若年性認知症の当事者である丹野智文さん(16頁参照)から、認知症の当事者にとって大切なのは「認知症があつても主体的に自分らしく生きる」ことなのだ学びました。

医師は正確な診断とエビデンスに基づく治療をおこない、ご本人やご家族を応援する役目があります。「こうすれば治る」「こうすれば維持できる」ということは、もちろん大切ですが、そればかりを目的にして、ご本人が誰かの言いなりになってしまったら、本末転倒です。
医師が「何かをしてあげる」のではなく、ご本人を主体とした「一緒にやっていく」という形で、一人ひとりが持ついろいろな可能性を生かしていきたいと考えています。



山崎英樹医師
清山会医療福祉グループ
代表
認知症の人と家族の会
宮城県支部顧問